二〇一九年コスモス全国大会の記

東京／アルカディア市ヶ谷

一日目全体会

秋晴れの東京に全国各地から百二十名の会員が集まった。定刻、大会委員長桑原正紀氏によって開会が宣言される。続いて高野公彦氏の挨拶。途中、歌会Ⅱの題のヒントに触れる場面があり、和やかな笑いが起こる。この大会を「短歌を通して人生を楽しむ時間に」というメッセージを送られた。

渡英子氏による講演は、白秋の歌のフレーズを引用した「華やかにさびしき秋や――北原白秋の短歌」というタイトルで行われた。宮英子氏と同名である嬉しさを語りつつ始まった講話は、白秋の、詩人の弟子と歌人の弟子に対する指導方法の相違に踏み込む。歌人には一対一で添削指導した白秋が、詩人に対しては詩句を訂正することなど無かったことを、資料を示しながら説き、その理由を、詩においては才能の有無が問題になるが、歌は鍛え方次第で優れた歌人になっていくと白秋は考えていたのではないか、と結論された。

講演終了後、直ちに移動。グループに分かれて歌会Ⅰが始まる。会終了後、明日の歌会Ⅱのための題が、「雨または雨冠の文字」と明かされる。懇親会までの二時間を各々作歌に取り組んだ。

大会日程

第一日　9月22日（土）

11時30分～12時20分　受付
12時30分　開会　挨拶・高野公彦
12時40分～13時40分　講演　渡　英子氏
「華やかにさびしき秋や――北原白秋の短歌」
14時00分～16時30分　歌会Ⅰ
〈A〉助言者：大野・奥村・小島　司会：金子
〈B〉助言者：岡崎・影山・木畑・清水・水上芙　司会：四野宮
〈C〉助言者：後藤・鈴木・高野・原賀・福士　司会：米田郁
〈D〉助言者：大松・風間・狩野・田中・藤野　司会：森田
〈E〉助言者：桑原・橘・松尾・水上比　司会：辻本
16時30分～18時30分　題詠制作（題「雨」または雨冠の文字）
18時30分～20時30分　懇親会

第二日　9月23日（日）

8時50分～11時40分　歌会Ⅱ（題詠）
12時00分～12時20分　表彰
12時30分～14時00分　さよならパーティー

［参加者名簿］〈北海道〉稲場洋子・後藤美子・斎藤嶺也・坂倉恵美子・新保弥代枝・高橋妙子〈青森〉福士りか〈岩手〉安保コト・吉田史子〈宮城〉薄葉茂・斉藤梢〈山形〉榎本久美子〈茨城〉金子智佐代〈埼玉〉神保外子・田中愛子・丹波真人・村田淳子〈千葉〉大西淳子・影山一男・風間博夫・黒岡美江子・小栂礼子・小湊正子・高野公彦・豊島秀範・藤野宏子・役重隆子〈神奈川〉赤石智子・石川通子・石原佳子・井鍋幸子・奥野政勝・加藤久子・河北笑子・工藤亜希子・清水正子・鈴木久美子・高橋美羽子・土屋美代

懇親会の司会は大西淳子氏。小島ゆかり氏による乾杯の後は、信濃トリオのダンス、共通語と正調津軽弁の共演、ピアノの弾語り、さらにデュオ水上、チーム愛知、長崎の歌姫による好演、そして有志によるスピーチと続き、賑わいのうちにデザートもなくなり第一日は終了。　（有川知津子）

歌会報告（Ⅰ…一日目、Ⅱ…二日目）

〈**Aグループ**〉

［歌会　Ⅰ］

アドバイザーに大野、奥村、小島の選者諸氏、司会に金子智佐代氏を含む二十三名で開会。一首を席順に二名と選者一名が講評した。

「解る」は解ると解るでは歌意が変わるのでルビが必要。越南、河内は越南（ベトナム）、河内（ハノイ）とルビを振るのが読者に親切であること。時事詠については対象となる時事を正確に捉えて詠うことなどの助言を頂いた。

また、調べを確かめるには「夏は来ぬ」の曲に合わせ自作の歌を歌い最後に「なつ～はきぬ」と付け加えてぴったり終われば〇Kという高野氏直伝の方法が披露された。

［歌会　Ⅱ］

一日目に「雨・雨冠のつく漢字」の題で詠んだ詠草から四首選歌した後、前日と同様に進行した。

・明日からは用がなくなる病院の

霊安室の場所を知りたり

の評では「死と言う言葉をどこにも使わず、毎日のように見舞っていた身内の死を、敢えて感情を抑えて詠うことで深い悲しみを伝えている。さらに雨冠を霊の文字に当てるなどトリプルアクセルとも言うべき」という選者の言葉に鑑

子・長谷川重紀・藤崎絢子・松村千津子〈**東京**〉浅田みどり・池田恭子・石川るみ子・大松達知・奥村晃作・勝木尚子・狩野一男・桑原正紀・小島なお・小島ゆかり・小林登喜恵・四野宮和之・関矢展子・田村悦子・坪井真里・能勢玉枝・原賀瓔子・福島壺春・北条忠政・本土和子・前中映・松尾佳津予・松尾祥子・水上比呂美・水上芙季・森田卓子〈**新潟**〉岡崎康行・橘芳圀・摩尼久晴〈**富山**〉中川暁子・西嶋圭子・西村好美〈**石川**〉中山基子〈**福井**〉内藤丈子〈**長野**〉今村日出子・斉藤淳子・野村房子・三浦陽子・宮外みどり・洞田哲子〈**静岡**〉小田部雅子〈**愛知**〉井上啓子・大塚浩・近藤卯月・鈴木竹志・柴田有里・高橋みどり・野村まさこ・山田恵里〈**三重**〉森田治生〈**京都**〉木畑紀子〈**兵庫**〉大西よしこ・中村京・長井淑子・藤岡成子〈**奈良**〉米田郁夫・米田靖子・田北加世〈**鳥取**〉石田信夫・中村恵〈**広島**〉新宅道和〈**山口**〉鈴木千登世〈**香川**〉宮西史子〈**愛媛**〉豊田桂子〈**福岡**〉有川知津子・有中房子・大西晶子・大野英子・木下幸則・栗山貴臣・栗山由利・中村仁彦・藤野早苗〈**長崎**〉江頭洋子・立石千代女・安田博行〈**熊本**〉辻本浩〈**宮崎**〉荒巻睦代（以上120名）

大会詠草（1）選者選（五選者以上の重選）

（大野・影山・田中・田宮・原賀・福士・藤野・松尾・水上比・宮里選）

八月の無風の街をかたむけてペットボトルの水飲みほしぬ　小島ゆかり

（大松・岡崎・奥村・風間・清水・高野・原賀・藤野・水上芙選）

リュウグウと三億キロの距離をおく星の厨にゆふべ米研ぐ　石井由美子

（影山・小島・清水・橋・田中・田宮・藤野・水上比選）

キッチンで手を洗ひをり花束にせんめん台を貸す春の午後　原賀瓔子

（大野・岡崎・影山・清水・高野・藤野・水上芙選）

ここからは星と木の葉が名告りあふ時間静かにカーテンをひく　三浦陽子

（大野・大松・狩野・鈴木・田中・水上芙選）

日の暮れに雨は降り来ぬさはさはと蚕が桑を食む音に似て　森田卓子

賞、作歌の姿勢を教えられた。

最後に、解釈が難しかった歌の作者に質問する時間が設けられた。

（浅田みどり）

〈Bグループ〉

［歌会 Ⅰ］

一首につき二名の評者と一名の選者が評を述べた。高得点歌は次の二首。

①苦瓜を採りて夫がもどり来ぬ蚊取線香の煙とともに

②驟雨しろく奔り過ぎたり消えをりし蟬声徐々にもりあがり来る

①について、評者からは情景が浮かび、夏の風物詩のよう、選者からは夫の描写がもう少しあるとさらに良くなる、とあった。

②について、評者からは蟬声が「もりあがる」の表現がよい、選者からは動詞を減らす工夫があるとさらに良くなる、とあった。

［歌会 Ⅱ］

題詠の高得点歌は次の一首。

・雨の字の四粒のなみだ愛しくて ひとしづくづつ丁寧に書く

評者二名、選者一名ともに漢字「雨」のなかの四つの点を雨粒に見立てた作者の独創性に注目し、下の句につなげた感受性が素晴らしいと評を述べた。

雨、または雨冠の入った歌、とのお題に対して、梅雨、秋雨前線熱帯雨林など多彩な雨が詠われ、「電」という意外な雨冠の歌もあり、活発に意見が交わされた。

「夕立」を使った一首には多くの点が入ったが、失格となったのは残念だった。（坪井 真里）

〈Cグループ〉

［歌会 Ⅰ］

講師の渡英子氏も選者に加わられ、一首につき二名が評し選者が（狩野・小島・鈴木・高野・田宮選）

「二つ折りの恋文」白き蝶々が戟草の闇にかくれて入梅（ついり）　黒岡美江子

大会詠草（2）全体互選高点歌（既出の作品は作者名のみ記す。以下同様。）

＊大会での表彰は選者を抜いた順で行われた。

（一位）石井由美子（二位）小島ゆかり（三位）原賀瓔子

（四位）森田卓子（五位）今村日出子（六位）三浦陽子

（七位）高橋みどり、井鍋幸子、福島壺春（十位）役重隆子

幾千のひまわり群れてゆれるなかひとつはきみの麦わら帽子　今村日出子

どこへでもゆける予感に満ちながら今日おさなごは歩き初めたり　高橋みどり

くもの網（い）は妖しき舞台雨粒がスパンコールとなりてきらめく　井鍋幸子

放牧の牛にゆくてを阻まれてひととき海の秋を見てをり　福島壺春

木琴になりたいなつて騒いでる　風にかがよふ濃緑の樫　役重隆子

大会詠草（3）グループ高点歌

〈A〉（一位）石井由美子（二位）今村日出子、小島ゆかり（四位）高橋みどり、金子智佐代

尺玉の菊の大輪しだれたるのちのぬばたま木星あかし　金子智佐代

〈B〉（一位）大西晶子、長谷川重紀（三位）木畑紀子、神保外子、大塚浩

苦瓜を採りて夫がもどり来ぬ蚊取線香の煙とともに　大西晶子

驟雨しろく奔り過ぎたり消えをりし蟬声徐々にもりあがり来る　長谷川重紀

木畑紀子

講評した。高点歌を一首挙げる。

・日の暮れに雨は降り来ぬさはさはと蚕が桑を食む音に似て

小さい頃の思い出、下句の表現がよい。高野氏の助言を挙げる。上句を「町田にて夕雨降れり」など具体を入れると更によくなる。

また他の歌では、漢字と平仮名のバランスについて、平仮名を多くすると嫌みがでる。目立たないのが一番よい。ゾシマ長老などインパクトのある言葉や寺山風の歌もあり有意義な歌会であった。

［歌会 Ⅱ］

二日目は題詠の歌会。前日の「雨・雨かんむり」の二十三首より四首を選歌。

・かみなりを雷さまと言う祖母の居てきれいきれいと見てた閃光

高野氏は結句を「見ていた閃光」と助言。雨・雨かんむりは多種多様となり、需要・帝政露西亜・霞から雷蔵や健さんの雨のなぐり込みまであった。また広島県の方言の混じった歌や佐渡の金北山の歌など変化にとんだ歌が並んだ。司会者の進行も和やかで、親睦の深まった充実の全国大会の歌会であった。

（村田　淳子）

〈Dグループ〉

［歌会 Ⅰ］

一首について座席順で二名、選者一名で評を行う。

・遠くても近いポストに出しに行く近くにはない遠くのポスト

様々な解釈が生まれた一首。同じ内容を上下で繰り返していて煙に巻かれた感じ。上句と下句のポストは違うものなのかと混乱してしまった等の意見が出された。選者の藤野早苗氏が、遠い／近いという距離感覚は主観的なものであ

おもふこと半分言へてしたいこと半分出来れば上々の生　神保外子

うづまきてビル風吹けり平成初期火の見櫓がありし駅前　大塚　浩

ひたすらに祈るがごとき老体の太極拳のスローモーション　吉田史子

〈C〉（一位）森田卓子（二位）吉田史子（三位）原賀瓔子、摩尼久晴、前中映

ずつしりと両手に重きをかかへたり精米したてのあたたかき米　摩尼久晴

盆踊り終へて帰り来真野の江のみぎはの匂ひ夜に踏みつつ　前中　映

少年が投げては落とす学帽の届かぬ梁に夏蝶しづか　藤岡成子

〈D〉（一位）役重隆子（二位）三浦陽子、藤岡成子、風間博夫

お帰り！と彼の日の続き出来さうなやさしい日差し　十七回忌　風間博夫

遠くても近いポストに出しに行く近くにはない遠くのポスト　山由利

〈E〉（一位）宮外みどり（二位）福島壺春、勝木尚子（四位）栗

われが先われにわれにと餌をねだるかほより大き子燕のくち　宮外みどり

みどりごが全身全霊で泣くやうな夕やけ空に立ちつくしたり　勝木尚子

夕立があがつてすこし重たげに狗尾草ゆれる猫がゐる道　栗山由利

大会詠草（4）題詠互選高点歌

・題「雨」または「雨冠のある字」

〈A〉

①高原の濃霧に籠る乳牛の鳴き声のどかこだまもあらず　奥野政勝

りながら、主観と客観を一首のなかで転換してみせた面白さがあると評した。郵政民営化批判の歌ではとの思わぬ角度からの意見も。

［歌会 Ⅱ］

一日目と同じ形式で評を行う。

・大志ある人らは同じ雰囲気で…
　ひばりの帝王みたいに話す

歌会終了後の質問タイムまで熱い議論の交わされた一首。題「雨／雨冠の字」から「雰囲気」を使用した工夫が評価される。一方で「大志」を文字通り捉えるか野望とアイロニカルに取るかで意見が分かれる。極めつけは「ひばりの帝王」。鳴き声と重ねてうるさいほどによく喋る人、揚げひばりになぞらえて上昇志向の強すぎる人、など各々自由な鑑賞を楽しんだ。美空ひばりではと言う人もいた。

（小島　なお）

〈Eグループ〉

［歌会 Ⅰ］

自己紹介の後、一首に三名が評し、アドバイザー一名が講評した。

・人皆がスマホに夢中の待合室私
　は古き手帳を開く

「古き手帳」に味わいあるとする意見。［縦書きノート］と具体を置いてはどうか、現代社会批判であるなら「私は」とせず、光景として詠む方法もある、の助言。

・梅雨寒にひつそり繁るヤマザク
　ラ星空のごと実を鏤（ちりば）めて
　暗さを出すと「星空のごと」の比喩がもっと生きる。「梅雨寒の樹闇（きやみ）に繁る」の方法も。作品に寄り添う多くの助言があった。

［歌会 Ⅱ］

三十分での選歌の後、題詠「雨」の二十四首についての歌評。

・梨むけば梨の雫は朝の陽に光と
　なりて手首をつたう

美しい歌、結句がリアルという意見。「有の実をむけば雫が」で、言葉の重なりを無くす、の助言。

・ひつじ雲の列が伸びゐる座間の
　空午前九時すぎ戦闘機とぶ

初句と対峙するような結句には、普通ではない日常の現実がある、の評が心に残った。「朝露」「丑雨」「雲丹弁当」「八雲の胸像」「電車」など、「雨」の字を詠み込んだ特色ある歌が並んだ。

（斉藤　梢）

②雨の日はざわざわとしてわれを呼ぶ忘れてきたる傘の数々　小島ゆかり
③餅、豆腐あられに切りて鯛ほぐし霰粥煮る柚子熟れるころ　浅田みどり
〈B〉
①雨の字の四粒のなみだ愛しくてひとしづくづつ丁寧に書く　立石千代女
②息深く赤子ねむりぬアマゾンの熱帯雨林燃え続く夜を　池田恭子
③味噌少し濃くして雨の夜に作るとんとん豚汁雨もう止まん　鈴木千登世
〈C〉
①鉄路にて帝政露西亜を馳せゆきぬ与謝野晶子は鉄幹を追ひ　鈴木竹志
②新しい長靴はいてまた脱いで雨を待ちつつ子は眠りたり　福士りか
③かみなりを雷（らい）さまと言う祖母の居てきれいきれいと見てた閃光　石川るみ子
③下がり眉ゆゑいい人と思はれて言はれつぱなしに帰る雨の夜　吉田史子
〈D〉
①秋のステップ踏んだのでせう雨上り土にジグザグ鳥の足跡　役重隆子
②ホームにて暮らせる母も聞きゐるや真夜しづかなる秋の雨音　田中愛子
③傘のことを天傘（ユーサン）と呼ぶひとびとのしづかな汗をとほく思へり　大松達知
〈E〉
①丑雨の降る気配にて目覚めたり浅き眠りの旅立ちの朝　土屋美代子
②梨むけば梨の雫は朝の陽に光となりて手首をつたう　大西淳子
③うどん屋の軒先かりて雨やどりぬらしたくないまつさらの靴　栗山由利